令和６年度山形県献血推進協議会議事録

１　**開催日時**　令和７年１月 28 日（火）　15:30～17:00
２　**開催場所**　山形県総合研修センター　１階講堂
３　**出席者**
（１）**委員**

間中英夫、鈴木克典、岡嵜千賀子、柿崎明美、板垣有紀、奥山賢、木村和弘（岩田雅史代理）、加藤克彦、遠藤洋也、永岡幹子、土屋隆子、五十嵐雪子、辻原吉子、内山満月、加藤裕一（山田敬子代理）、横山寿行、鈴木育子、玉虫秀明

以上 18 名

（欠席委員）

佐藤孝弘、鈴木浩幸、後藤道子、本間優子、小笠原千聡、熊谷弘美

（敬称略）

（２）**事務局**　山形県健康福祉部：森野医療統括監、本間薬務・感染症対策主幹　他
山形県赤十字血液センター：鎌塚所長、金光調整監　他

４　**会議概要**
（１）**開会**（15:30）

（２）**あいさつ**

（３）**協議**
①　**報告事項**
ア　事務局（健康福祉企画課）
資料１に基づき報告

イ　事務局（山形県赤十字血液センター（以下「血液センター」））
資料２に基づき報告

＜質問・意見等＞
〇辻原委員（ガールスカウト山形県連盟）
資料１の４ページ目に献血セミナーの実施について記載があるが、令和６年は当連盟より献血セミナーの実施を１回依頼させていただいた。当会員は献血という言葉は知っているものの詳細について知らないものが多い。
献血セミナーでは献血の由来や歴史など幅広くご説明いただき、深く学習することができた。また、質疑応答では血液センター小関課長より懇切丁寧にお答えいただき、献血を自分事として捉えることができた。献血セミナーが普及すれば献血への関心及び理解度の向上につながると思う。

○加藤氏（山形県保健所長会）
　資料２の９ページ目に令和６年度の骨髄ドナー新規登録者数は 445 人と記載があるが、ドナー対象者から年齢の制限により外れる高齢者はどの程度いるか。
○事務局（血液センター）
　調べ回答する。

○柿崎委員（山形県栄養士会）
　①50 代 60 代の献血者が増えている背景には、どのような要因があるか。
　②今回の報告に献血不適格者に関する情報がなかったが、どういった状況になっているのか。また、献血不適合者に対するフォロー体制等あれば教えていただきたい。
○事務局（血液センター）
　①高齢者の方が増えていることが一番の要因である。
　②若年層の不採血者が多い。献血バスでの不適格者は７％～８％程度だが、今年度 11 月辺りから 10%付近まで増加しており、男性でもヘモグロビン値が少なく不適格となる方が増えてきている。

○内山委員（山形県学生献血推進協議会代表）
　①資料１の４ページ目に記載がある献血セミナーの実施について、高校生や大学生に向けた献血セミナーの実施により、知識の定着は以前と比べ深まっていると感じている。その一方で、実際に献血できるかは別問題である。
　　大学生は、献血推進ボランティアとして献血会場等での呼びかけや献血等で貢献できる機会が多くあると思うが、高校生はボランティアの活動ができていない現状がある。献血に立ち会うだけでも高校生自らが献血するきっかけになるのではないかと考える。
　②資料２の４ページ目に記載がある学生ボランティアの育成について、献血ルームは山形市にしかなく、庄内、置賜、最上は移動採血車による献血が主となる。
　　学生がどういった場所であれば献血しやすいのか考案することができれば、若年層の献血者確保につながると思う。

○奥山委員（日本赤十字社山形県支部）
　今日の新聞に城北高校に通う高校生が献血をしたとの記事があった。とても良い取り組みである。どういう経過や働きかけがあり実現したのか。また、マスコミ取材等についても教えていただきたい。
○事務局（血液センター）
　山形市内の私立高校において、これまで何十年と献血を実施していなかったが、若年層の献血者確保が必要であるということから、村山保健所の和田献血推進員に相談し、何とか今年度山形市内の私立高校における献血の実施に取り

組みたい旨を城北高校に依頼したところ、献血の実施に至ったものである。
　取材に関しては山形ライオンズクラブに協賛いただき、山形新聞社に取材を依頼した。

○間中会長（山形県医師会）
　山形県は一時期、血液の廃棄率がとても高かった。日赤と県による合同輸血療法委員会を立ち上げてからは、だいぶ廃棄率が低下し、日赤で集めた血液に関しては各医療機関で大事に使用している。

②　諮問事項

令和７年度山形県献血推進計画（案）について

事務局（健康福祉企画課）
　「令和７年度山形県献血推進計画（案）」に基づき説明
事務局（血液センター）
　資料３に基づき説明

審議の結果、（案）のとおり承認された。

＜質問・意見等＞

○柿崎委員（山形県栄養士会）
　献血不適格者において、男性のヘモグロビン値が低下しているとのことだが、働き盛りの栄養問題と関連があると思う。献血をしにきた方の意志が次にもつながるように、パンフレットの配布やビデオの放映など、どうすれば貧血傾向にならないか、献血できなかった方へのフォローをお願いしたい。
○事務局（血液センター）
　ヘモグロビン値の基準に満たない献血希望者については、看護師が貧血予防のパンフレットを渡すとともに十分な時間を確保し栄養指導を行っている。

○辻原委員（ガールスカウト山形県連盟）
　令和７年度山形県献血推進計画（案）２ページ目に、血液センターは、県独自のキャンペーンを実施するとあるが、具体的にどのようなキャンペーンか。
○事務局（血液センター）
　献血ルームでは２月にバレンタイン献血を予定している。山形調理師専門学校の学生がクッキーを作り、献血いただいた方にクッキーを差し上げている。
　また、県立図書館と献血ルームのコラボとして、それぞれをZOOMでつなぎ、血液の使われ方などについてお子さんに説明したり、親子献血セミナーとして「ありがとうの手紙」の上映を行い、夏休みの自由研究に活用いただくようにしている。

○土屋委員（山形県小中高等学校教育研究会養護教諭連絡協議会）

年代別献血者数では50代、60代が増加しているとのことだが、いずれ献血できない年齢になることを考えると、若年層の献血に対する意識を高めることが重要である。

また、小中学生、高等学校への健康教育も大事であるが、今、ヘモグロビン値が低いことが話題になっていることから、小中学生への体づくりから教育していかなければならないと感じている。セミナーを実施する際には体づくりの項目も盛り込んでもらえると良いのではないか。

子供が親に伝えることも大事であるので、セミナーのパンフレット等あれば活用していきたいと思う。

○五十嵐委員（山形県婦人連盟会）

幼少期の子供とその親を対象にした啓発について、親への献血思想の普及だけでなく、献血会場に来た親にも献血いただきたい。子供を預けられる託児所のようなものがあればいいのではないか。

○事務局（血液センター）

託児所ではないが、キッズルームが献血ルームにはあるので、職員がずっとついている訳にはいかないが、時間を費やすことができるスペースはある。

○永岡委員（山形県高等学校教頭・副校長会幹事）

高校生が献血を知らないということはなく、献血が大事なことであることは知っている。高校生の年代になると初めての献血が高いハードルとなっているため、抵抗をなくすような工夫が必要になる。

パンフレットを配布し学校の事情に合わせ使えるようにしたり、セミナーができるというお話があれば、各学校でセミナーの実施に向けた検討は可能であると思う。そのような情報を学校側にいただければ普及できる。

今、どの学校でも探究活動をしており、看護師になりたい・福祉の仕事につきたいと考えている学生の中には、献血について探求している生徒も居る。

献血ルームに行き、体験やインタビュー等の活動をしている生徒も居るので、そのような生徒が伺った際には対応していただき、献血の大切さを伝えるとともに身近な人に伝えるよう話してほしい。

③　その他

事務局（健康福祉企画課）

参考資料の市町村献血推進協議会結果に基づき説明

（４）閉会（17:00）